

日本人の見た外国 -- よそもの (カルチャー・シヨック)

著者	佐藤 章
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	162
発行年	2009-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004812

カルチャー・ショック 日本人のみた外国

よそのもの

佐藤 章

二〇〇二年九月一九日にコートデヴィウォールで突如として内戦が勃発した。このとき、反乱軍支配地に少なからぬ数の先進国出身者が取り残された。その象徴的存在が、反乱軍の司令部が置かれた内陸の都市ブアケにあるインターナショナル・スクールであった。児童・生徒とその家族百数十人を保護するために、フランス政府は、コートデヴィウォール政府と反乱軍双方に圧力をかけて一時停戦を認めさせ、駐留フランス軍に退避作戦を実行させた。このニュースは、件のスクールの生徒とおぼしき少年が、ブアケを発って一路駆け戻る軍用車両の窓からフランス国旗である赤・白・青の三色旗を掲げ、「フランス万歳！」と歓呼する映像とともに世界に配信された。

それでも、人目憚らず喜びを表現する少年の行為には反発を感じずにはおれなかった。少年は、安否を気遣う友人や親族が待つ母国へ戻る事ができるだろう。しかし、多くのコートデヴィウォール人にとって、このコートデヴィウォールこそが生きる土地であり、そこで生きる限り内戦は消せない現実なのだった。前線への動員命令に怯える調査先の公文書館の番兵、将来を憂えて塞ぎこむ調査助手、兵隊が押し込んで全部家財を奪われてしまったとすすり泣く友人宅の使用人、諸悪の根源を旧宗主国に転嫁してフランスの施設に火炎瓶を投げ込む青年たち。内戦前にはついぞ見たことのない人びとの様子は、長らく平和を享受してきたこの国が壊れゆく予兆のように見え、私にはただただ痛ましく感じられた。私は、街ゆく人びとに目を追って目立ち始めた、コートデヴィウォール国旗の緑・白・オレンジの三色を模したリボンを自分の車にも取り付けた。そうすることによって、街頭にあふれる当惑と怒りと悲しみへの共感を示したかったためである。

そんなある日、友人宅の門番と立ち話をしていたときのこと、日々感じる痛ましさと将来への不安を口にした私に対して、彼が慰めの笑顔とともに言った言葉は私に突き刺さった。「あんたは大丈夫さ。日本軍が迎えにきてくれるんだろ?」。私には返す言葉がなかった。むしろ、「日本軍」がやって来ようはずはない。しかし、万一戦闘が本格化した場合には、フランス軍が在留邦人全員を「救出」しにくるはずだとの連絡は日本大使館から回ってきていた。彼の一言で私は、自分が目の前の彼と同じ内戦下のコートデヴィウォールに「住んで」はいないことを思い知った。ここに暮らし続ける者たちと、「救出」されうる者たちとの間には目に見えない深い亀裂が走っていて、間違いなく私は、あの三色旗の少年と同じ側の世界にいる——それを認めるのはつらいことだった。

内戦勃発から四カ月後に、日本政府が退避勧告を发出した。すでに休戦協定が結ばれて戦闘は収まっていたが、フランスの強引な和平仲介に抗議する暴動が激化しており、先進国出身者が巻き添えで標的になりかねないという判断に基づく決定だった。私は選択の余地なく、二日後にアビジャンから欧州行き飛行機に搭乗した。日本国の旅券を握りしめながら、私は引き剥がされるような気持ちを禁じ得なかった。

(さとう 章) あきら／アジア経済研究所
地域研究センター)